

「ひれ伏してわたしを拝め」マタイ 4:1—11

四旬節が始まりました。荒れ野にひとり立つ主イエスを、私たちは見つめています。四十日間の断食のあと、弱りきったその時に、誘惑者は近づきました。

誘惑は、乱暴な言葉では始まりません。それは静かに、もっともらしい言葉で始まります。

「あなたには価値がある。」「あなたには挑戦する自由がある。」

「あなたには確かな報酬がある。」

そして最後に、こう言うのです。

「だからそれを得るために、ひれ伏して、わたしを拝んで証明せよ」

創世記3章、エデンの園でも、同じ声が囁きます。

「本当に神は言われたのか。」「それを食べれば、あなたは神のようになれる。」

エバが見ると、その実は、美しく、賢くなれそうに思えました。

罪は、いかにも怪しい、危険な姿で現れるのではありません。輝く、魅力ある姿で近づきます。「より自由に、より高く、より確かな、自分になれる」とささやきます。けれどその中心には、神さまでなく「自分」があります。

荒れ野で、悪魔はイエスさまに言いました。「石をパンに変えよ。」「神殿の頂から飛び降りよ。」そして最後には、世のすべての栄光を見せて言います。「ひれ伏して、わたしを拝め。」ここに誘惑の正体があります。何を拝むのか。だれを中心にするのか。それが問われています。

私たちの毎日にも、同じ声が響きます。成功すれば価値がある。認められれば意味がある。

安全が保証されれば安心できる。そしてその先にあるのは、「これに頼れ」「これにひれ伏せ」という声です。それはお金でしょうか。評価でしょうか。力でしょうか。また自分の正しさでしょうか。私たちは何に心を献げているでしょうか。

主イエスは、静かに答えられました。

「主なるあなたの神を拝み、ただ神に仕えよ。」イエスさまは、力によって悪魔に勝たれたのではありません。聖書の御言葉によって、神への信頼によって、誘惑を退けられました。それは十字架への道でした。石をパンに変えなかった主は、最後の晩餐でパンを裂き、ご自分を私たちに与えられました。

神殿から飛び降りなかった主は、十字架から降りようとされません。

世の栄光を拒まれた主は、十字架という辱めを受け入れられました。

それが、私たちの救いの道でした。

ローマの信徒への手紙5章12節から19節でパウロは、

「一人の人によって罪が入り、一人の方によって恵みが満ちあふれた。」

と書き記します。

アダムが手を伸ばした、悪しきものからの誘惑から、キリスト・イエスは手を引かれました。

アダムが神のようになろうとしたところで、キリストは神のしもべとなりました。

そこに、私たちの新しいいのちがあります。

賛美歌 460 番は祈ります。

「こころみうけ 悩むとき 祈りたまえ わがために。」

「誘惑を受けて悩んでいる今、哀れな私のために、お祈りください。」

誘惑はなくなりません。しかし私たちは一人ではありません。

十字架の主は、私たちの弱さをご存じです。

世の楽しみに目を奪われるとき、世の宝に迷うとき、主の御苦しみを思い起こすようにと賛美歌は歌います。

四旬節の四十日は、自分が何にひれ伏しているかを見つめる時です。私たちは何の前に、ひれ伏しているのでしょうか。恐れにでしょうか。欲望にでしょうか。それとも神にでしょうか。

誘惑者は最後にこう言いました。「ひれ伏して、わたしを拝め。」

しかし主イエスは、ひれ伏されませんでした。むしろ十字架において、

神のみこころに従い、最後まで父を拝まれました。そして復活されました。私たちも、弱さの中で揺れながら、それでも主に向き直ることができます。

四旬節は、敗北の季節ではありません。神にのみひれ伏す自由を、再び学び直す季節です。主の御手に頼り、この道を歩んで行きましょう。

アーメン